

# 琉球大学学術リポジトリ

互いに働きかけ関わりあいのある集団づくり：  
生活班をもとにした活動をふやすことを通して

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2018-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 比嘉, 君代, Higa, Kimiyo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/41621">http://hdl.handle.net/20.500.12000/41621</a>

## 互いに働きかけ関わりあいのある集団づくり

—生活班をもとにした活動をふやすことを通して—

Group Work Training to Promote Interaction in the Classroom  
: Improvement of Group Activities Based on School Life

比嘉 君代

Kimiyo HIGA

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・浦添市立当山小学校

### 1. テーマ設定の理由

私たちを取り巻く社会の生活水準は向上し便利になっている。その反面、人々の生活はゆとりを失い、慌ただしいものになってきた。こうした慌ただしい日々のなかで、家庭や地域社会での連帯意識は弱くなり、子どもたちもまた人との関わりが希薄になったと言われている。このことを、住田(1999)は「子どもの仲間関係の希薄化現象」と言っている。

学級でも人間関係がうまく築けない子、いつもきまった友だちだけと遊ぶ子、関わりを持とうとしない子の姿が散見されるなどコミュニケーション能力を育成することが学校教育の課題としてあげられるようになった(文部科学省 2011「コミュニケーション教育推進会議」)。要するにいま学校教育において、集団の一員としての在り方を学ぶ集団活動、つまり「学級づくり」を考えることは重要な教育的課題になってきたと言えるだろう。

ところで、「学級づくり」とはなんだろうか。それは、学級という集団が関わりを通して互いの存在を認め合うことを目指す。関わることで衝突もあるだろうが、それが関わり方としての学びにつながる。こうした、意図した関わりを重ねることで子ども同士がつながっていくと考える。

私の学級づくりを振り返ると、互いの良さに気づけるような取り組みや、素直に仲間を認めることのできる雰囲気づくりを心がけてきた。しかし2年前、それがうまく進まない学級、子どもたちと十分な信頼関係が築けない学級に直面した。その学級では、ふざけや暴言、陰口等の問題が次々と起こり、それらの問題が起こるたびに気になる子への注意をくり返す管理主義的な指導に陥ってしまった。さらには、問題解決のために子どもと担任教師の1対1の関わりが増えることによって、他と他を繋ぐ集団活動や学級づくりという視点が薄れてしまった。したがって、もういちどいま必要とされている教育的課題に立ち返り、担任と子どもの関係づくり、子ども同士のつながりをつくることの大切さと、集団として成長する学級について考えてみたいと思う。

### 2. 研究の目的と方法

私は上記のような考えのもとで、班活動を通してどのような関わり合いを増やせば集団が成長するのか追究することにした。具体的な方法は、生活班をもとに学習や係・当番の仕事を担うとともに、行事での活動やトラブル等を班で考え解決する場、詩を書き交流す

る場を設定するというものである。これらの実践によって、子どもがどのように変容するか、子どもの姿や発言、感想文、さらにアンケート等から考察していくことにする。

### 3. 集団づくりの意義

多数の子どもで営まれる学級という集団は、豊かな関わりが生まれるとともに、そのなかでは矛盾や葛藤もおこり、それを互いに解決する場となる。なかでも班は恰好の教育的仕掛けだと言えるだろう。班の必要性について大西(1972)は、子どもたちは一緒に過ごしているものの、「親密感を持ち接触しあっているという連帯感を持っているのは、たかだか、5、6人のグループにすぎないということです。その5、6人をのぞくと、その他の者には、彼らが同じ集団に属しているという意識すら持っていない」とし、だからこそ「接触を恒常的に作り出してやらない限り、学級は集団として真に生徒たちに認識されているとはいえない」と述べている。つまり子どもたちが自主的に作り出しているグループのままでは、学級集団としての社会性は育たず、意図的に作りだした班(小集団)で問題に対して話し合い、解決・改善する活動をつくることによって、学級集団としての成長や社会性が育まれると指摘していると考えられる。本実践でもこの考え方を踏襲する。

### 4. 今年度の研究の重点

#### (1) 4月の学級の実態

5学年：男子17名、女子17、計34名(支援学級1名含む)

学年6クラス(206人)、昨年と同じクラスだったという子は2～4名で、初めて同じクラスになったという子どももいる。休み時間になると、別のクラスの友だちのところへ向かう姿が見られ、互いの関係性は浅いと考えた。また、怒るとすぐ手を出すA男、特定の子としか話さないB子、人見知りで話しかけられても返事をせずに黙っているC子等様々な姿が目についた。素直で穏やかな子どもたちだが、まわりの友だちとどう関わればいいのかわからない子がいると捉え、活動内容に応じてペアや班にして弾力的に関わる場を設定した。子ども同士の横のつながりが深まれば、居心地のよい学級となり学校生活が豊かなものになると考えた。

#### (2) これまで班をどんな場面につかっていたか

私が実践してきた班活動は、学習班や給食当番等であった。学習班は教科や授業の内容によって活用しない日もあり、頻度に差がある。給食当番は2つの班で受け持っていたが、担任が役割分担を組み話し合いはない。トラブルがあった時は、担任と当事者だけで解決することが多く、まわりの子どもたちとのやりとりはなかった。それでは互いの関わりは少なくなってしまう。そこで、これまで以上に班で関わりを持たせるため、生活班を基本に活動を進める。学級での確認ごとや行事のテーマ決めなど随時班を使うよう意識した。

#### (3) この時期での班のつかい方

関わりを増やすために次のことに重点を置いた。5学年という段階は友だちとの関係のつくり方に悩む時期だと考え、教師の側から関わり合う場を意図的に設定する必要がある

と捉え、生活班を学習だけでなく、係や当番でも使うことにした。

また、トラブルが起きた場合には、班の仲間との話し合いの場を設けることにした。それによって当事者は客観的に見てもらうことができるし、他方で班員は関わる者としての意識を持ちながら関わりと同時に、もしも自分がトラブルの当事者になった場合にも、まわりからアドバイスをもらいながら解決策を考えだすことにつながるだろうというねらいがあった。その際に、うまく気持ちを伝えきれない子どもには通訳してもらう場を設けた。そのことで仲間が自分の気持ちを理解してくれたことを嬉しく思うことと、それを支えにして自分で話せるようになることをねらった。またトラブルの相手の行為の理由を考える場も設けた。相互の行為について理解を促し他者理解につながると考えた。

さらに、行事や節目等で「詩」を書いて交流することも取り入れ、気持ちや思いを言語化し、詩で表現し班ごとに交流した。直接話すことはできなくても、コメントなら素直な気持ちを伝え合う場になると考えた。

最後に、話し合いの時に心がけたのは子どもの言葉で進めることである。当事者だけでなく、まわりで見ていた子どもからどう見えていたのか、子どもたちの発言を求め確認しながら進めた。そのため班の子どもたちを集め、話し合う場面を増やした。教師のコメントは控え、「～と言っているけど、話を聞いてどう思う？」という具合に子どもたちの考えを引き出すようにした。話し合う前には、①少し時間をおく、②班の仲間に話を聞いてもらう等気持ちが落ち着けるようにした。③世話好きな子や他の友だちにも聞いてもらい、一緒に話し合いに参加することもよしとした。そうすることで、気持ちが整理できると考えた。

～子どもの感想より～

- イライラしていたけど、(友だちに)話を聞いてもらっておちついた。
- (いろんな人の)考えが聞けるからよかった。

このように、日常的に生活班を中心とした活動で、いつでも話し合う場を設けることや、弾力的にまわりの仲間や他の班と関る場面を増やすことで、多様な考えや価値観を学べる場となり、自分の考え方や捉え方、行動について考えるきっかけとなると思われる。そして自分たちで解決へと向かうことができれば、自治の力も育まれると考えた。

## 5. 特徴的な実践

### (1) 宿泊学習でのトラブル・関係者の話し合い(6月)

前日の雨が上がり、気持ちのよい朝を迎えた6月、野外泊のためにテントを建てていたときにトラブルが起きた。お調子者のD子が、A男の新しいシャツを汚したことが原因で、A男は「汚れが落ちなかったらどうする。弁償しろ」と叫び、D子は「知らんし、お前が勝手に転んだからだろ」と言い合っている。私は2人の間に立ち、「ゆっくり説明して」と伝えた。しかしA男は「かかってこい、どうせ口だけだろ、できないくせに」とD子を挑発する。カッとなったD子が飛び出そうとしたのを「待って」と、私が抑えやや強引にその場から離れた。D子と数名の女子と私で話すことにした。D子はシャツの汚れを落とそうとタオルで叩いたが、逆に汚れを広げてしまう結果となり、A男は怒ったと言う。謝る気持ちはあったが、A男の言葉でキレたと話す。A男の側にいた教頭先生から彼の様子を聞くと、

心配した男子が話を聞いていたらしい。夕食後に話し合うことになった。話し合いには、A男とD子それぞれが一緒にいて欲しい人と、様子を見ていた者が参加した。A男はD子にからかわれ、追いかけた時に転んだ。また、シャツはこの日のために買ったということがわかった。お互いの行動の理由や気持ちについて話した後、「これからどうするの？」と私は尋ねた。するとD子は、隣りの女子と何か話した後「からかわなければよかった」と呟く。A男は「汚れが落ちないと許せない」と言った。そこで、落ち着くように私が話しかけると暫くしてA男が、「謝ってほしい」と言った。D子はちょっと考え謝って解決となった。

## (2) 学習（体育）でのトラブル・班の話し合い(9月)

ソフトバレーの試合が行われた9月、互いのプレーに声を掛け合いながらA男の班は、順調に勝ち進んでいた。しかし女子2人にミスが見られるようになった。するとA男は「もっと動いて」と、きつい口調で怒鳴るようになった。A男も苛立ちからかミスが目立ち、試合は負けた。負けたことに腹をたてたA男は怒鳴り、E子は泣きながら反論し大げんかとなった。2人を心配して穏やかなF男は、2人の間を行き来し仲をとりもつ。A男は、「文句は言ったが班の仲間です次の試合も出たい」と言うが、E子は「文句を言うA男とは試合に出たくない」と話す。結局試合開始の時がきて、そのケンカは解決しないままA男の班は同じ仲間と試合をし、試合は勝った。私は授業の後で班の子に「ケンカしていたけど、今の気持はどう？」と尋ねた。するとA男は「さっきは言いすぎた。でも自分はイラついていた」。E子は「こんなに言うのなら（試合）やりたくないと思った」。F男は「ケンカして相談もできないし、試合は始まるし困った」と話した。A男は、「女子にもイラついていたけど、自分のミスにもイラついていた」と、6月は言い張るだけだっただろうが、今回は自分の気持ちを素直に話した。その言葉を聞き、まわりの子たちは頷いていた。そこで話は終わった。

## (3) 清掃当番でのトラブル・子どもが合意をつくる(11月)

特質（自閉症の疑い）をもつG男に対して、清掃をしないと不満を持つ子が数人いた。注意するとG男は逆ギレし泣いてしまうからだ。11月の2週目の水曜日、関りのある他の班と一緒に話し合うことになった。特定の子としか話さないB子もその中にいた。それぞれがG男に対して不満を話した。G男は「何回も言われたら、嫌な気分になって聞きたくない」、まわりは「一度で聞かないさ」と言い合いになった。G男はB子が文句言うのも嫌だと話す。「しけら～（へこむ奴）」とB子は反応したと答えた。まわりも「聞いた」と頷く。しかしG男もうるさいと言いつつ。普段ボーっとしているH男が「2人とも（G男とB子）相手が悪いと思っているでしょ」と言った。H男はほとんど話さない子で、彼の発言に私たちは驚いた。2人は頷く。そして、「みんな悪いところを直せばいいさ」とつけ加えた。そこで私が「みんなの悪いところって？」と聞き返すと、H男は自分の悪いところも含め一人ひとりの悪いところを小さな声で話し出した。発言にも驚いたが、的確に言いあてた。しかし、G男は何か言いたげな様子を見せた。それを感じたH男が「どうしたら注意を聞くの」とG男に尋ねた。その姿にも驚いていると、「一度に何人も言わずに誰かひとりが言って」と答えた。こういうふうには声をかけたらいいいんだねと、班の話し合いは終わった。

(4) 班活動を通じた学級の変化

① 個人の成長・詩を書き読み広げる

4月頃のA男なら、腹をたてたら自分の感情のまま大声で怒鳴り続けていた。トラブルになった時の状況についても、自己中心的に捉え、自分の主張が正しいという態度を通す。感情が高ぶり、相手を挑発したり手をだしたりすることもあった。そんなA男は、休み時間に一人で過ごす姿も見られた。それが、6月の宿泊学習のトラブルでは、落ち着いて話し合いに参加する。彼の気持ちが落ち着くことをねらって、A男の話聞いていた男子に彼を任せたことや、話し合う前に班での食事をすることが、一旦トラブルから解放される形となったこと。また、話し合いには、一緒にいて欲しい子やトラブルの様子を見ていた子たちも参加してもよいことなどから落ち着いて話せたと思う。そうして、9月のソフトバレーのトラブルで、A男の「これまで勝ち続けた班の仲間と次の試合も出たい」という言葉は、仲間と共に勝つ喜びを味わいたいという気持ちだと捉えた。ケンカの最中にA男はF男を遠ざけひとりである場面がある。それは自分で自分の気持ちを落ち着けようとしている姿だと考えた。後になってA男が「手を出しそうだったからひとりになった」と話した。A男は仲間とのつながりを意識し、手をだす自分を抑えた。言いすぎた自分をふり返ることもできはじめた。それは、班での関わりを通して、相手に対する思いが築かれていったと考える。

A男の気持ちを確かめる意味で、運動会の練習も始まった頃、班の仲間や運動会に向けての気持ちを詩に書いてもらった。

班の仲間

今日 ぼくは友だちとけんかした 当山みすずさんとけんかした 言いげんかをした  
 ぼくはとてもしらついた ぼくはこう思った みすずさんは、ぼくを仲間だと思っているか不安だった  
 ぼくは仲間だと思っている でもいつの間にかけんかを忘れて ぼくとみすずさんは笑っている  
 その時ぼくは仲間だと思った ぼくは班の仲間はいいなと思った

このことからA男は、ケンカをした後に、相手が自分をどう思っているのかについて不安を持つ。いらついた自分を自覚しつつ、自分がカッとなったら口調が強くなることを知っていて、発した言葉に後悔の念を持つ。それでも、ケンカの後に笑って話せる関係を嬉しく思い、自分を受け入れてもらった喜びが素直に表れている。詩から、班の子どもたちがどう受け止めているか知りたくて、感想を書いてもらった。

- ・私はケンカをしても、班の人は仲間だと思っているよ！！今の（新しい）班でもあまりケンカをしないように・・・。E子
- ・A男さんってケンカ多いですね。ぼくはケンカがとっても嫌いです。A男さんはケンカしてもすぐ仲直りできると思うよ。けど、ケンカはやめたほうがいいよ。あの時の班はよかったな。だってみんなで助け合えるんだもん。F男
- ・A男はケンカをした時はすぐ怒るよね。私はいつの間にかケンカしていた人と笑って私は本当の仲間だと思った。I子

班員の子どもたちは、A男の言動を受け入れている。だから、E子はケンカをしたA男に対して自分は友だちだと告げている。また、3人ともA男のことを「よくケンカをする子」として見ているが、そのことを非難するのではなく心配している。F男の「ケンカしてもすぐ仲直りできると思うよ」はケンカをした後のA男が後悔している気持ちを知っているからだろう。I子は、ケンカしても笑いあえる関係のよさを感じ取った。A男の班は、互いに関

わりを重ねることで、A男の素直な気持ちや、振り返って後悔する一面を知り、認め合えることができるようになったと考える。

## ② 集団の変化・話し合いを通して

4月の頃、トラブルが起きた時には、まわりの子は騒ぎを見ているだけで、介入することを避けるという状態であった。そこで、まわりで見ていた子や話し合いに参加したい子には声をかけ、当事者以外にトラブルについて客観的な意見を聞いた。私は進行役となる。はじめは当事者以外を「なぜ参加させるの？」と尋ねる子もいたが、「冷静に見ている友だちの意見を聞くためだよ」と答えると受け入れてくれた。この取り組みを重ねていくと、9月頃には、当事者とその班員の参加だけだったものから、「僕も見ていた」とまわりの子も進んで話し合いに参加するようになった。また、話し合いに参加したいという子も少しずつ現れてきた。そうして、自ら話し合いに参加する子たちからの、意見が聞かれることが増えていった。11月くらいになると、私に「〇〇が掃除をしない」と訴える子や「先生、相談がある」と不満を話す子に、その話を受容しながら、「どんな話し方をすれば相手に伝わるかな」と一緒に考えていくと、子どもたちの方から答えを出してくるようになってきた。そして、「どうする？先生も一緒に話し合う？」と聞くと、少し考えてから「自分たちでやってみる」と答えることが増えた。自分でやってみるといふ子の姿を追って見ていると、自分の友だちや、同じ考えを持つ子、班の仲間と一緒に、相手に気持ちを伝えている様子が見られた。その後、「どう？うまく伝えられた？」と尋ねると、「うん」と頷く。満足そうな表情もあれば、少し不安げな顔も見られる。私は「うまくいくといいね」とだけ話し様子を見ることにした。少しずつではあるが、自分たちで問題を解決していこうという気持ちは育まれてきたと思う。

## ③ 授業の変化・学習班を日常的に活用して

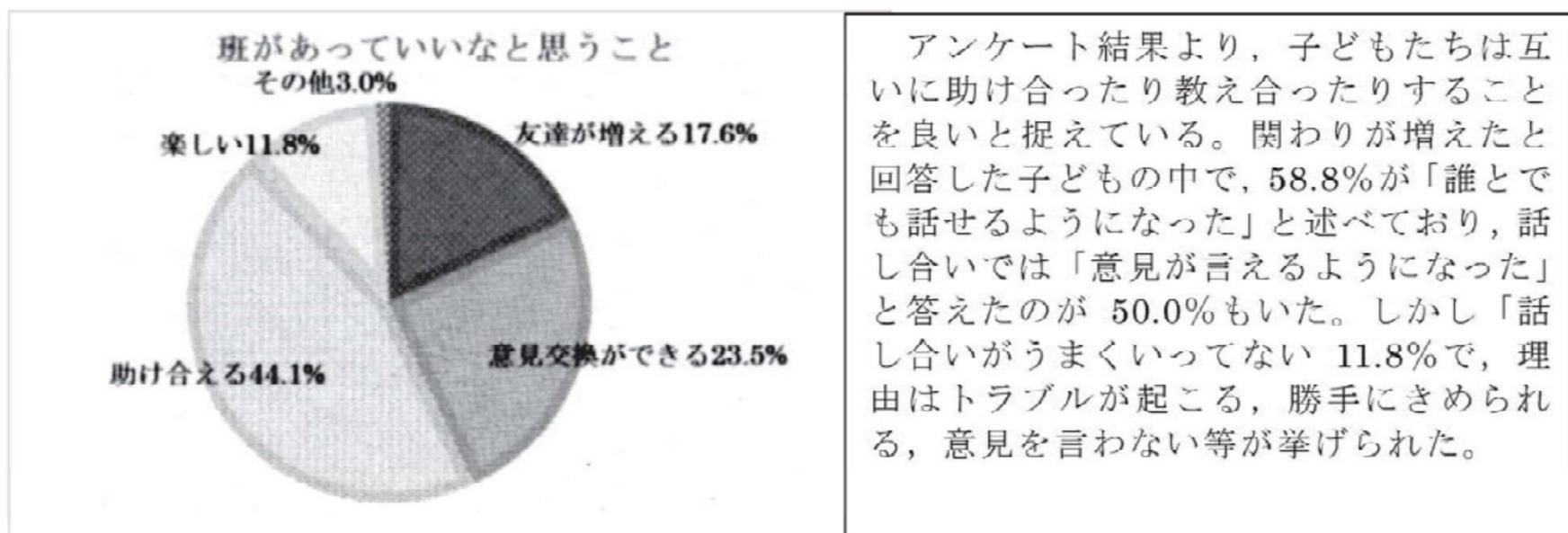
夏休みが明けてからは、社会の調べ学習や国語の意味調べ、答え合わせ等で「班で解いていい？」という言葉が聞かれ、プリント学習では「先生、〇〇に教えていい？」と、班で教え合う姿がみられた。1月になってからの算数では、コンパスを使うのが苦手な男子に隣の女子が手伝う姿もみられた。音読では、読めない漢字を班以外の子が教えることも見られ、班に関係なく教え合うことができるようになってきた。「班があっていいなと思うこと」のアンケートでは、助け合える44.1%という結果を得た。このことから、子どもたちは班を使った学習の良さを感じている。国語の竹取物語から、暗記発表会の感想を紹介する。

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>●暗記するのは難しかったです。けど、みんなで読み合って練習するのが楽しかったです。ちょっとまちがえたけど、それ以外はスラスラ読めたので、嬉しかったです。</li><li>●一人で覚えていても（やる気がでるから）みんなで覚えた方がいいということがわかった。</li></ul> |
|---|

## 6. まとめ

### (1) 子どもたちは教え合うことを求めている・アンケートから

班での関わりを重ねた結果、子どもたちが班活動をどう思っているのかを確かめるためにアンケートをとった。



アンケート結果より、子どもたちは互いに助け合ったり教え合ったりすることを良いと捉えている。関わりが増えたと回答した子どもの中で、58.8%が「誰とでも話せるようになった」と述べており、話し合いでは「意見が言えるようになった」と答えたのが50.0%もいた。しかし「話し合いがうまくいってない11.8%で、理由はトラブルが起こる、勝手にきめられる、意見を言わない等が挙げられた。

### (2) 班（仲間）を意識させる取り組み

班を意識させるために、4月から仮説を立てたことを整理すると下記のように3段階になった。子どもは話し合うことでいろいろな見方があることを知り相手を理解した。

きっかけづくり	班の仲間を知る	班で考え・実践する
<ul style="list-style-type: none"> <li>○教師からの声かけ（案）が中心</li> <li>・ペア活動と班活動を組み合わせる</li> <li>・班長の仕事内容を知る</li> <li>・型に沿った話し合い</li> <li>・トラブルや各活動で話し合う（教師も入る）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○班で相談・発表が中心</li> <li>・班で互いの考えを確認（学習・係・清掃）</li> <li>・トラブルでは、当事者だけでなく班員も意見を話す</li> <li>・学級のことも班で考える</li> <li>・教師以外が進行役を務める場合もある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○班での計画・実践が中心</li> <li>・実践したことを振り返り次の活動へ活かす</li> <li>・班から班へコメント（学習・係・当番）</li> <li>・トラブルを班やまわりの仲間と共に解決</li> <li>・解決できたことを教師に伝える</li> </ul>

上図のように関わりを段階的に設けた。きっかけづくりの段階では、教師と共に話し合う場面が多い。話し合いの型を伝えることで、しだいに安心して話し合うことができるようになる。班の仲間を知る段階では、互いの詩を読み合ったり、感想を伝え合ったりすることで、仲間の素直な気持ちを知ることができる。班の仲間と共に考え悩む場面が増えてくる。衝突する場面も増えるが、それを解決することで関わり方について学ぶことになる。班で考え・実践する場面では、係や当番でも自主性が見えてくる。他の班からの指摘を受け、自己を振り返り認めることもできるようになる。トラブルも自分たちで解決し、その後教師に報告する。解決できなくても、しだいに自ら次の策を考えるようになってくる。

大和久・丹野(2014)は「トラブルを一つひとつ乗り越えることで、子どもたちの自信につながる」と述べている。実践を通し、見えきた子どもの姿から実感することができた。

### (3) 具体的に班を使う場面

私が班をどの場面で使い、どのようなねらいをもって実践してきたか、振り返り表に分類し整理すると次のようになる。

生活班を基本とした日常的な関わり		
毎日の活動	学習班で使う	コメントや教え合い 話し合いの仕方を基に意見の交流を図る 学級会では班で意見を相談し司会も班で取り組む
	係を受け持つ	係の仕事を4人で分担 分担でも男女で組む 係のリーダーも決め活動の充実のため話し合いを持つ 係活動を互いのアイデアを活かせる場とする

課題研究最終報告

	清掃を班で受け持つ	清掃リーダーを決め分担は男女で組む 掃後に協力できたか確認し、連絡してもらう 役割を分担することで責任を持たせ協力する気持ちを高める
月に1度	給食当番を2つの班で受持つ(8人)	2つの班で相談し分担する 2つの班のチームワークを意識させる 給食時にはその日の活動について話し合い仕事に責任をもち協力する気持ちを高める
<b>行事や節目などイベント的な関わり</b>		
始業の日		始業式での出会いを日記に書き、帰りの会等で紹介する 互いの気持ちを知り合える場とする
4月		「出会い」をテーマに詩を書き、全休へ発表 数名に感想を言ってもらうことで分かり合える場とする
宿泊学習		日記に感想を書き、後日紹介する 行事を通して感じたことを互いに共感できる関係を築く
9月		「班」の仲間について詩を書き、紹介した後感想を発表しあい、班の仲間を読み合いコメントを書く 相手の意外な面を知ることによって出会い直しとなる
運動会		運動会の作文を書き班で読み合いコメントを互いに書く 互いが支えあう関係であることを知るきっかけとなる
トラブルがあった時		当事者や班の仲間、どのような行動がよいのか解決策などを考えてもらう ～話し合いの場合～ トラブルを見ていたまわりの子どもたちからも意見をもらうこともある 当事者に了解を得て班以外の子どもの話し合いの進行を任せることもある 自分の意見がうまく言えない場合は誰かに通訳を頼むこともよしとする まわりで話し合いの様子を見ることもでき、様子を見ていた子どもから感想や意見をもらう→出来事を自分のこととして受け止めるようにする

子どもたちは、いろいろな子と関わり成長していく。けれどもその関わり方は、関わることを通して学ぶのであり、関わる場面を増やすことがより良い人間関係をつくる楽しさを体験することになる。そのことは詩からも読み取ることができる。次の詩は、F男が12月に書いた詩である

今までの班  
ぼくはいろんな人と班になった ぼく以外が泣く大げんかもあった みんなで教え合って  
解いた問題もある 班のみんなと教え合えた でもぼくは 班の仲間に頼りすぎている  
ぼくは頼りになっているか心配だ でも班の仲間は とってもいい

以上より、生活班をもとに、班活動を生活や学習を中心に活用し関わり合いを増やしたことで、子どもたちは友だちとの関わり方を学び、関わることの楽しさを感じることができたと捉える。子どもは自分の話を聞いてもらい、共に考え解決することでつながり合える喜びを感じ取ったと思う。これからも意図的な関わりをもたせながら、子どもの力を信じ、子どもに任せながら共に成長していきたい。

文献

溝部清彦(2008).『子どもをハッとさせる教師の言葉』高文研

文部科学省(2011).「コミュニケーション教育推進会議」

日本子ども社会学会(1999).『いま、子ども社会に何がおこっているか』北大路書房, pp.46

大西忠治(1972).『班のある学級』 明治図書出版, pp.66-67.

大和久勝・丹野清彦(2014).『班をつくろう』 くりえいつかもがわ出版

丹野清彦(2017).『今週の学級づくり明日どうする』高文研